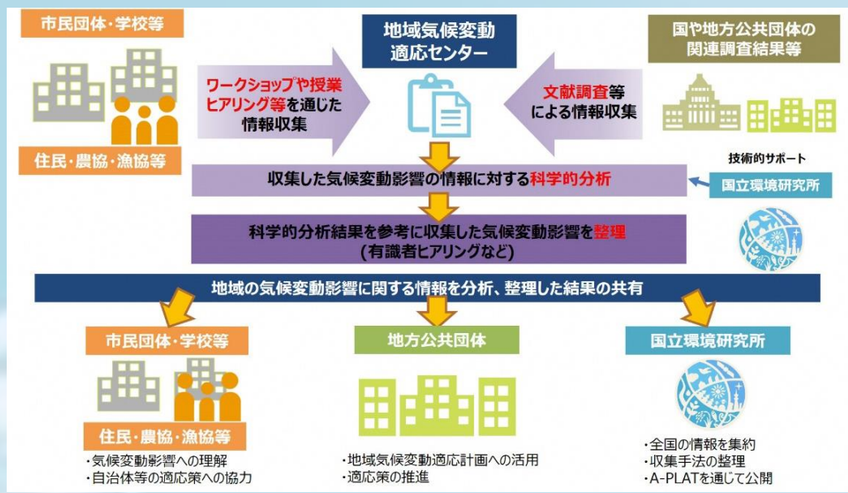
国民参加による気候変動情報収集・分析事業

福島県気候変動適応センター　×　福島大学共生システム理工学類

近年、福島県では記録的な高温や大雨の発生など、気候変動が原因と思われる様々な事象が発生し、県民の生活に大きな影響を及ぼしています。

こうした気候変動による影響への対策として、その原因となる温室効果ガス排出量を削減する、又は森林による吸収量を増加させる「緩和」とともに、気候変動の悪影響を回避・軽減する「適応」の取組が重要となっています。

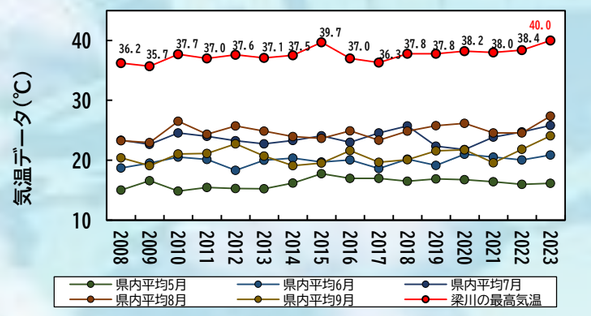
福島県気候変動適応センターでは、令和５年度に環境省委託事業「国民参加による気候変動情報収集・分析事業」の採択を受け、福島大学と共同で地域における気候変動影響の把握や、適応策に関する情報収集や分析を行っています。



環境省委託事業「国民参加による気候変動情報収集・分析事業」

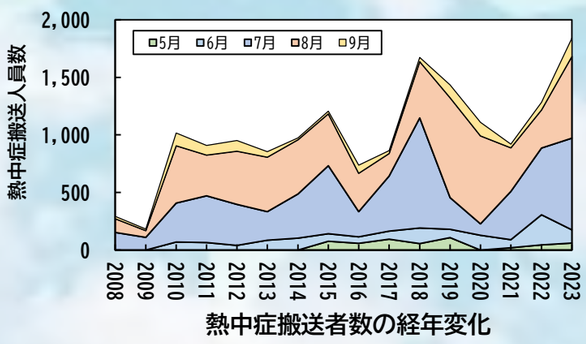
健康分野

福島県では令和５年において記録的な高温が続き、伊達市梁川では観測史上最高となる４０．０℃の最高気温を観測するなどしました。



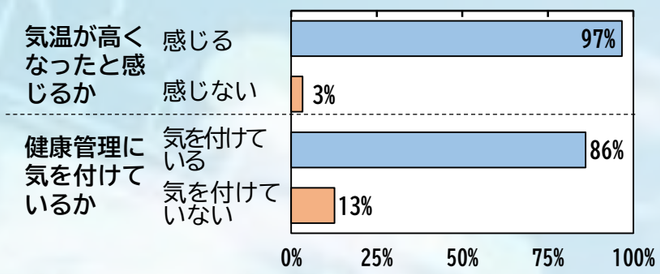
県内平均気温及び伊達市梁川の最高気温の経年変化

また、熱中症アラートの発令回数は１９回を数えたほか、熱中症搬送者数も１，８４０人と、これらも観測開始以来、過去最高を記録しています。



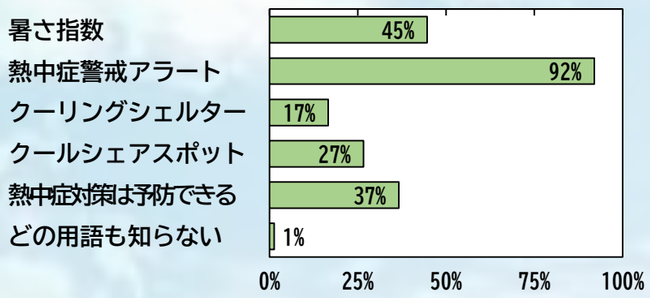
熱中症搬送者数の経年変化

令和５年１０月に県民アンケートを実施したところ、多くの県民が気温が高くなったと感じ、健康管理にも気を付けていることがわかりました。



気温が高くなったと感じるか、健康管理について

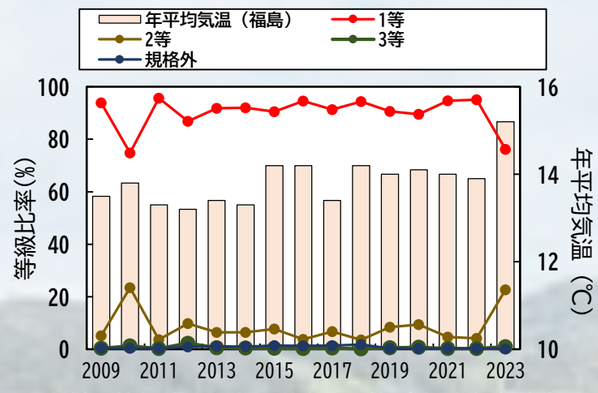
また、熱中症警戒アラートの認知は高い傾向にありますが、避暑避難施設であるクーリングシェルターの認知は低い傾向がみられました。



知っている熱中症対策の言葉

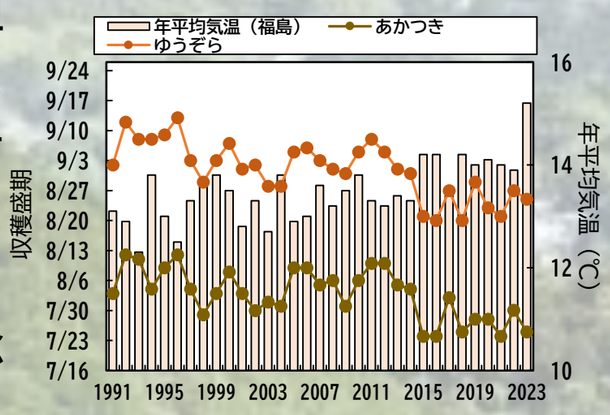
農林水産業分野

水稲においては、昨年の高温により、収穫期が早まるなどの影響がみられたほか、１等米の収穫割合が減少した結果となりました。



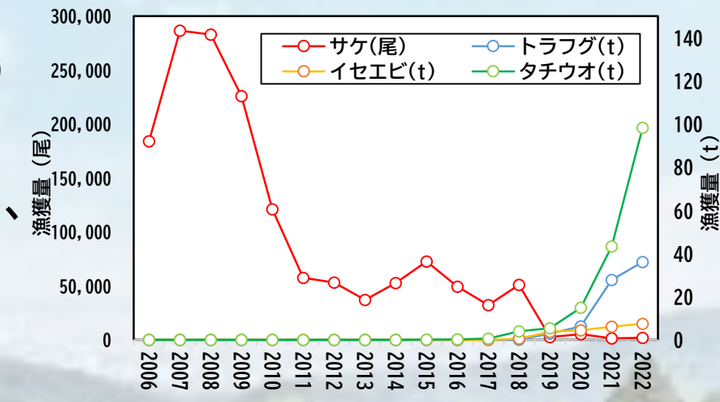
水稲の等級比率と年平均気温（福島）の経年変化

果樹においては、昨年「もも」や「なし」の収穫期が早まるなどの影響がみられました。また、寒冷帯を産地とする「りんご」では高温等による着色不良や蜜入りの低下、日焼けなどの品質低下が懸念されます。



ももの収穫盛期と年平均気温（福島）の経年変化

水産業でも、最近はサケの採補量が減少する一方、今まで漁獲の少なかったタチウオ、トラフグなどの漁獲量が増加していることが確認されています。



代表的な魚種における漁獲量の経年変化

また、農業関係者へのヒアリングから気候変動による農林水産業への影響、課題なども明らかとなりました。今後も影響や予測、それらを踏まえた対策の検討が必要です。

農林水産業関係者へのヒアリング結果

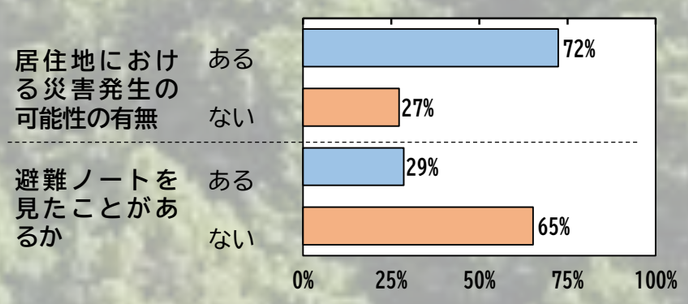
- ■ コメ
  - ・ 昨年は白未熟粒が発生する等、品質に影響。
  - ・ 高温に強い品種の研究開発などをJAなどで実施。
- ■ 果樹
  - ・ 昨年はりんごの日焼けなどの被害や、ももの収穫が例年より早まるなどの影響が報告。
- ■ 水産
  - ・ 近年、コウナゴが不漁である一方で、相馬でトラフグが獲れるようになった。
  - ・ 漁獲量と水温との関連や将来予測が課題。

自然災害分野

令和５年９月に福島県では線状降水帯が発生し、いわき市を中心として大雨が降り、河川氾濫や土砂崩れが発生し、多くの家屋や施設などで甚大な被害となりました。

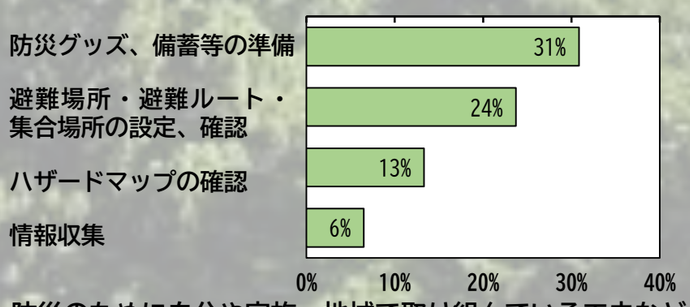
特に被害の大きかったいわき市の新川や宮川の現地調査を行うとともに、浸水深マップを作製しました。

令和５年に県民アンケートを実施したところ、県民の多くが居住地において災害発生の可能性があると感じていました。



居住地における災害発生可能性、避難ノートの認知

また、防災のために取り組んでいる工夫や取り組むべきことには、防災用品の準備や避難場所等やハザードマップの確認が上位となりました。



防災のために自分や家族、地域で取り組んでいる工夫など（回答の多かった上位４つ）